

日常検査から見える病態—生化学検査①

精確なデータを迅速に提供することが臨床検査室の第一義的な使命ですが、それだけに終始していてよいのでしょうか？ 高性能な自動分析装置が普及し、さらには標準化が進展して、「誰でもどこでも」が当たり前になってくると、そういった疑問が湧き上がってきます。一方、個々の検査値の質は飛躍的に高まりましたが、果たして、多大な労力を費やした分だけ臨床で活用されているのだろうか？ という疑問も生じてきます。

検査室は、精確性や迅速性に加えて何を追求すべきか？ もちろん、最先端検査技術の開発も大事な仕事ですが、まずは、データに付加価値を付与していくことが重要かと思います。それには、検査値が読めるようにならなければいけません。

本特集は、検査値を判読する能力を養う一助になればと考え企画しました。単独では疾患特異性に欠ける、あるいは、量的な変動に注目しているだけでは病態変化を捉えられないような項目であっても、見方を少し変えることによって、格段と臨床的意義を高めることができるということを学んでいただけると幸いです。さらには、付加価値を高め、臨床医が検査を活用するようになると、検査値に対する臨床医からの要求が高まり、それをきっかけとして、技術的に飽和状態に達したと思い込んでいた検査項目の改善、あるいは新たな検査技術の創出につながることもあるということをご理解いただけたらなとおうれしく存じます。（山内 一由）